



つなぐ

県立広島病院 呼吸器内科 村上 徳崇

呼吸器内科専攻医2年目の村上^{やすたか}徳崇と申します。現在、県立広島病院で勤務しております。初期臨床研修の2年間も同院で過ごし、専攻医として引き続き残ったため、「県病院歴」は4年目となりました。この4年間は、医学的知識や手技を学ぶ時間であると同時に、医療が決して一人で完結するものではないことを実感する時間でもありました。

当院での初期臨床研修は同期17名と比較的多く、そのうち自分を含め7名が専攻医として残りました。専攻医になると、診療方針の決定や患者さん・ご家族への説明など、初期研修医の頃とは異なる責任が生じます。自分の判断に迷う場面も多くありましたが、院内の各科に相談できる同期がいることは大きな支えでした。また、上級医の先生方、病棟や救急外来の看護師さん、薬剤師の先生方、クラークさんをはじめとした多くの職種の方々にも声をかけやすい環境がありました。このつながりは、同じ病院に残ったからこそ得られた財産であったと感じています。

私は大学時代、広島大学医学部のバレーボール部（霞バレー部）に所属していました。広島にはVリーグのチームもあり、現在も妻と試合観戦に行くことがあります。霞バレー部では、追い出しコンパや新入生歓迎コンパなどの折に、多くのOB・OGの先生方とお会いする機会がありました。そこでは、バレーボールの話だけでなく、診療科の魅力、病院での働き方、医師としての姿勢について伺うことができました。県立広島病院にもバレー部のOB・OGの先生方が多く在籍されており、私が呼吸器内科を選んだ

背景にも、そうした先生方との出会いが大きく影響しています。

学生時代、あるOBの先生から伺った言葉が今も印象に残っています。「医療業務はバレーボールと同じです。バレーボールでは、同じ選手が続けてボールに触れることはできません。自分が上げたボールを、必ず誰かに託さなければなりません。それは医療の現場も同じです。医師が出した指示を看護師さんが実行し、薬剤師さんが安全性を確認し、それぞれの職種が患者さんを支えている。バレーボールを通して、人に託すことの大切さを学んでください」当時は学生でしたが、医師として働き始めた今、その意味を日々痛感しています。

呼吸器内科では、肺炎、間質性肺炎、肺癌、呼吸不全など、急性期から慢性期、時には人生の最終段階に関わる場面まで、多様な患者さんと向き合います。一つの検査、一つの処方、一つの説明の先には、必ずそれを受け取り、次につなげてくださる誰かがいます。自分の判断が、看護師さんのケアにつながり、薬剤師の先生の確認につながっていく。その連続の中で、医療は初めて形になるのだと思います。

まだまだ未熟で、周囲の方々を支えられることの方が多い毎日です。しかし、支えられていることを自覚しながら、いつか自分も誰かを支え、安心してボールを託してもらえる医師になりたいと考えています。広島の医療に少しでも貢献できるよう、今後も日々研鑽を重ねてまいります。



Instagramを始めました。

広島県医師会や市区郡地区医師会の
イベント情報をお知らせしています。
フォローをお願いします。



広島県医師会
Instagram